

SESSION 2024

**CAPES
CONCOURS EXTERNE**

SECTION : LANGUES VIVANTES ÉTRANGÈRES

JAPONAIS

**ÉPREUVE ÉCRITE DISCIPLINAIRE
COMPOSITION EN JAPONAIS - THÈME ET/OU VERSION**

Durée : 6 heures

L'usage de deux dictionnaires unilingues en langue japonaise (un dictionnaire de langue et/ou un dictionnaire de kanji) est autorisé.

L'usage de tout ouvrage de référence, de tout autre dictionnaire et de tout matériel informatique ou électronique (dictionnaire électronique, ordinateur, téléphone, calculatrice ou autre) est rigoureusement interdit.

Il appartient au candidat de vérifier qu'il a reçu un sujet complet et correspondant à l'épreuve à laquelle il se présente.

Si vous repérez ce qui vous semble être une erreur d'énoncé, vous devez le signaler très lisiblement sur votre copie, en proposer la correction et poursuivre l'épreuve en conséquence. De même, si cela vous conduit à formuler une ou plusieurs hypothèses, vous devez la (ou les) mentionner explicitement.

NB : Conformément au principe d'anonymat, votre copie ne doit comporter aucun signe distinctif, tel que nom, signature, origine, etc. Si le travail qui vous est demandé consiste notamment en la rédaction d'un projet ou d'une note, vous devrez impérativement vous abstenir de la signer ou de l'identifier. Le fait de rendre une copie blanche est éliminatoire.

INFORMATION AUX CANDIDATS

Vous trouverez ci-après les codes nécessaires vous permettant de compléter les rubriques figurant en en-tête de votre copie.

Ces codes doivent être reportés sur chacune des copies que vous remettrez.

► **Concours externe du CAPES de l'enseignement public :**

Concours	Section/option	Epreuve	Matière
E B E	0 4 3 0 E	1 0 1	9 3 1 1

L'épreuve comporte deux parties que le candidat abordera selon l'ordre de son choix :

- Une composition en japonais
- Une traduction (version)

COMPOSITION EN JAPONAIS

5 つの資料を用いて「旅行と移住」(Voyages et migrations) というテーマで問題提起をし、その問題について議論する論文を日本語で書きなさい。

資料 1

今はもうはやらなくなった社員旅行が昭和三十、四十年代には、団体旅行の大きな部分を占めた。その目的地は、多くが温泉地だった。年に一回もしくは春秋に二回。(中略)

社員慰安旅行の隆盛は、旅行雑誌の記事にあらわれる頻度からも想像がつく。『旅』昭和二十九年九月号は「秋の社員旅行プラン特集号」となっている。その中で「社員旅行の幹事さんへ！」と題して全国各地の旅行先おすすめルートやいくつかの社員旅行の実例を紹介している。『旅』昭和二十九年の九月号の特集は「サラリーマンの小旅行」。サラリーマン作家として有名だった中村武志が「妻と子供からの解放感」と題して、同僚と行く旅行の楽しさを書いている。肩書は、「作家・国有鉄道厚生局勤務」となっている。

(中略)

10 社員の団体旅行がいやがられていたかということ、かならずしもそうとは言い切れない。当時の日本人が、外泊を伴う旅行をする機会は現在と比べて極端に少なかった。そこで年一回なり二回なりの社員旅行は、やはり心待ちにされ、また楽しいな娯楽だったのである。

毎月いくらかずつを積立て、それに追加徴収までされて貴重な休日をつきあいの旅行なんかオカシクテ、とうそぶくヒネクレものもあれば、旅行のお蔭で有名な温泉場はひと通り歩いたよという経験強調派もある。ああいうときでないと大ぴらには外泊できないのでネ、との恐妻型など、キヨホウヘンはもろもろある(『旅』昭和二十九年九月号)

社員旅行には反発も批判もずっとつきまとっていたが、やはり全体として娯楽の乏しい時代を反映して、不平派の中にもやはり旅行を楽しみに待つ気分が存在していた。

白幡洋三郎『旅行のススメ 昭和が生んだ庶民の「新文化」』

(中公新書、1996年)

資料 2

今から二十四年ほど前のことになるが、ギリシャの島に住んでいた。スパツツェス島とミコノス島。「住んだ」といってもせいぜい合わせて三ヶ月くらいのことだけど、僕にとっては初めての「外国で暮らす」体験だったし、それはずいぶん印象深い体験になった。ノートに日々の記録をつけ、あとになって『遠い太鼓』という旅行記の中にそれをまとめた。

5 その後も何度かギリシャに行くことはあったけれど、それらの島をもう一度訪れたことはなかった。だから今回はそのとき以来の「再訪」ということになる。「ピルグリメイジ（巡礼）」という英語の表現がある。そこまで言うのはいささか大げさかもしれないが、要するにおおよそ四半世紀昔の自分の足跡を辿ることになるわけで、懐かしいといえはたしかに懐かしい。とくにミコノス島は小説『ノルウェイの森』を書き始めた場所だったので、僕の中にはそれなりの思いのようなものがある。

10 1986年9月にローマに着いて、その初秋の美しい光の中で一ヶ月ほどを過ごし、それからアテネに行き、ピレエフス港から船でスパツツェス島に渡った。イタリアに本格的に住み始める前に、ギリシャで数ヶ月を送りたかった。10月も半ば、ギリシャの観光シーズンは既に終わって、働き疲れたギリシャ人たちがホテルやレストランや土産物屋の店仕舞いを始める頃だ。この時期になると、いくらギリシャとはいえけっこう寒くなってくるし、天候もだんだん悪くなる。曇りの日が多くなり、冷やかな風が吹き、
15 雨もよく降るようになる。クルーズ船で夏の陽光溢れるエーゲ海の島を訪れたことのある人は、秋が深まったときこそがどれほどひっそりとした場所に（ある時には陰鬱なまでの場所に）なり得るかを知ったら、きっとびっくりするに違いない。

どうしてそんな魅力的とはいいがたい季節を選んで我々（というのは僕と奥さんのことだが）がギリシャの島に住むようになったのか？ まずだいいちに生活費が安かったから。高物価・高家賃のハイシーズンの時期に、ギリシャの島で何ヶ月か暮らせるような経済的余裕は、当時の我々にはなかった。それから天候のよくないオフシーズンの島は、静かに仕事をするのに向いているということもあった。夏場のギリシャはいささか騒がしすぎる。僕は日本で仕事をするに当時疲れていて（それはまあ、一口では言えないいろいろな理由があったのだが）、外国に出て面倒な雑事を逃れ、ひっそり仕事に集中したかった。できれば腰を据えて、長い小説も書きたかった。だから日本を離れて、しばらくのあいだヨーロッパに住むことに決めたのだ。
25

村上春樹『ラオスにいったい何があるというんですか？』

（文藝春秋、2015年）

資料3

まあなんとかやるやろう―「留学生業」開業―

ひとつ、アメリカへ行ってやろう、と私は思った。三年前の秋のことである。理由はしごく簡単であった。私はアメリカを見たくなったのである。要するにただそれだけのことであった。

(中略)

アメリカの現代文学がむやみやたらと好きであったということも、私をアメリカ行きに駆りたてた一つの
5 要因であろう。誰だってある国の文学に凝れば、その国のもろもろが見たくなるではないか。といっても、
私が「文学的散歩」とやらの愛好者であると思ってくださると困る。私はもっと単純な人間であろう。小説の筋など読んだはしから忘れてゆく便利なたちの私は、たとえば、ニュー・イングランドのソローゆかりの
地ウォールデン^{ポンド}池のほとりにたたずんで懐旧の情に身をゆだねる、というようなことはもっとも苦手とする
ところなのである。私はボストンに住んでいたからよくウォールデン^{ポンド}池に出かけたが、それはソロー氏のイオ
10 リのあとにたたずみに行ったのではない。水泳のためであった。水は冷たいが、なかなかよい泳ぎ場であ
った。

そんな高級な文学的なことより、私には、いったんこうと思えば、ぜがひでも見に出かけなければ
気がすまないというアホらしいほど旺盛な好奇心があるのだ。そいつが私をアメリカへ放りやったとい
てよい。とにかく、私はくり返そう、私はアメリカを見たくなった。ただそれだけのことであった。

15 アメリカのもろもろのなかで、とりわけ私が見たいと心ひそかに憧れていたものが三つあった。話があん
まり単純で子供っぽいので、ここに書くのがいささか気がひけるくらいだが、それはニューヨークの摩天楼と
ミシシッピ河とテキサスの野原であった。という、なるほど、おまえは要するに大きなものが好きなんだな、
とうなずかれる向きもあろう。そのとおりであった。私は、自然であれ、人間がこしらえたものであれ、大
きなもの、それもばかでかいものが好きなのである。ばかでかいものを見ていると矢も楯もたまらなくなる
20 といってよい。たぶん、それは、そのばかでかいもののなかに潜む（とあるいは勝手に私が想像する）わ
けのわからないエネルギーの塊のようなものが、私を故郷にひきつけるようにグイグイとひきよせるのであ
ろう。私は、友人のあいだで、ずいぶんと原始人、あるいは野蛮人の定評のある男であった。

このばかでかさは、もちろん、摩天楼や大河や野原にかぎったことではない。人間についても同じこと
が言えるであろう。たとえば、ばかでかい理性、情熱、洞察力、想像力、空想力、ばかでかい好奇心、
25 もの好き、陽気さ、のんきさ、あるいは途方もない怒り、悲しみ、笑い、あるいはまた野放図な食欲、
咀嚼力、消化力―そういったものの根底には、おそらく、ばかでかい人間エネルギーが存在し爆発しつ

づけているのであろう。私はそれを感じ、そしてシャニムそれにひかれて行く。私のばかりが好きを分析すれば、まあそういったところであらう。

小田実『何でも見てやろう』1961年

(講談社文庫、2017年)

資料4



海外渡航自由化から3年。日本人も世界一周旅行できる時代の到来に国内は盛り上がった 昭和42年3月6日、東京・羽田空港

出典：<https://www.sankei.com/photo/story/news/150524/sty1505240001-n1.html>

資料 5

いまから50年前の1964年に一般の人々に対する海外旅行が自由化された。それまでは特定の役人や政治家、輸出入関係業者、留学生などという、ごく限られた人しか海外に出ることができなかったから、かつてない大きな変化といえよう。この年の海外旅行者数は、わずか12万7749名（法務省統計）だった。

- 5 江戸幕府が鎖国体制をしいたのが1633年。以後明治維新まで235年間、日本人は外との交流ができなかった。しかし維新以降も一般大衆はそう大っぴらに海外に行けたわけではない。日清日露の戦役、戦前の満州国や南洋方面への移民、太平洋戦争下におけるアジア太平洋各地への出兵などは、いわゆる海外旅行とは異なる例外事例だったであろう。だから実質的には、一般的な日本人にとって1964年までのほぼ330年間、鎖国状態は続いていたと言えなくはない。
- 10 自由化以前は外貨の持ち出し枠に厳しい制限があり、それなりの大義名分がない限り、旅券の取得も外貨枠の確保も、並大抵ではなかったのである。

- したがって1964年の開国当時は、日本国民の多くに「やみくもな諸外国に対する憧れ」ともいべきものが横溢していた。それゆえ自由化後10年間で海外渡航者数は230万人もの数に伸びてゆく。そして次の10年間で420万人に。さらに84年からの10年間を見ると、これが1200万人という大台へと跳ね上がる。30年間にざっと100倍。このあと2000年に1800万人に手が届きそうにまでなるのだが、以後は多少のアップダウンを繰り返しつつ、12年
- 15 によようやく1849万人に達した。しかしその後も、そう明らかな上昇方向に向かうことなく、アウトバウンドに関してはいささかの停滞感が漂ったままである。

- なぜだろう。日本人は自由化開国第一世代30年ほどで、「こんなもんか」と飽きてしまったのか。
- 20 青い鳥も手に取って見たら「なーんだ」と思ったのか。あるいは比べて見たら日本の方がよかったとでも。もちろん日本の生活環境がバブル期や世紀末をはさみ、大きく変化してきたことの影響も少なくないであろう。中途半端に豊かになった先の第一世代が、子供たちの世代に対し「日本から外に出よ」と言わなくなったからか。つまり「過保護」ということなのか。あるいは日本の旅行業が「また行きたい」と思わせるような魅力ある、多彩な旅行商品を提供し続けることができなかったからであろうか。観光
- 25 学の一般原理・第一法則「旅の動機は、時間と予算を規定する」などと私は勝手に唱えているが、今後のアウトバウンドの動機づけをどうするか、しっかり考えて取り組む必要がある。

- 日本政府観光局が発表している数値では、日本の人口比出国率は2012年度でようやく14.5%。同年の韓国はこれが27.5%、台湾は43.9%、同じ島国の英国はと見てみると89.4%にもなっている。つまり日本のアウトバウンドは50年のスパンで見ると、最初の30年を
- 30 過ぎた後の20年間では、ようやく1.5倍。この間に台湾や韓国に大きく追い越され、いまや中国が大変な勢いで伸びてきた。かつて90年代半ばまで、アジア・ヨーロッパ・アメリカなど、主だった

世界各地で見たのは日本人の顔だけだった。いま各地に出かけてみると、中国や韓国からの人々ばかりに出くわす。アジア各国の主要空港では日本語表記が中国語・韓国語にとって代わられつつあるし、町に出ても日本人はいずこへ、といった寂しさを感じずるようになってしまった。

小林天心「海外旅行自由化50年の個人史—アウトバウンドの流れとともに—」（2015年1月、oai:asia-u.repo.nii.ac.jp:00016718）

TRADUCTION

Composition en japonais の資料 5 をフランス語に翻訳しなさい。